これはかなりはっきりと、核戦争の災厄を表すことば。「彼らは、そこから逃げてこのねこの国をつくったんじゃないか、時々そういう夢を私は見る。夢なんだけどそれは現実にあったことかもしれない。」 そういうひとつの空想をはさみながら、この『ねこのくにのおきゃくさま』を、ひとつの現代的な物語に変えていった。それがこの作品でしょう。

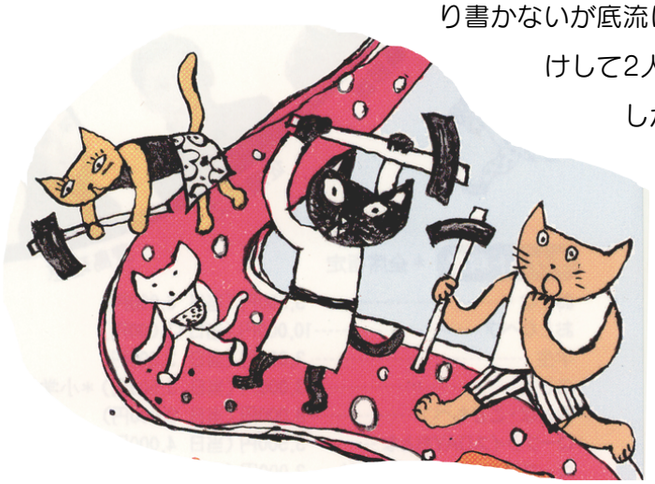
「変わること」 その葛藤に うち克つ力

ねずみの出現に刺激された大臣はその過去の、ねこがねずみを食うという時代を復活させたいと思っている。王は王で、それは知識として残っているから、そういう大臣の提案というか説得に、つい王も惹かれてしまう。しかし、ねずみは2匹だけですから、ねこの国全員で食べるわけにはいかない。 そして象徴として王は、あのねずみたちを食うべきだという風に大臣は扇動する。 王はそのことに反対の感情と、ついその意見に流されてしまう、両方がある。

王様を補佐する大臣をつくり、王と臣下の大臣との間の葛藤っていうものをそこにつくり出した。そして、ねこがねずみをとって食べたりする時代ではないんだけれども、本能という形、さっき、中学生高校生が歌ってくれた歌（天敵の歌）のように、そういう形で残っていた。

そういう形で脚本家は話を進めていく。 この、いわば「ねこがねずみを食う」というのは伝説にしかすぎない時代を、その時代をもういっぺん戻そうという風に考える大臣、それは脚本家にとっては、彼が経験した戦前と今の時代を重ね合わせている。 福田さんとは年齢が1日違い（1931年10月21日、林氏は10月22日生まれ）で若い時から一緒に芝居を作っていた。

彼がねことねずみの関係の古い関係を戻そうとする大人たちがいるという裏側には、彼自身経験した戦争と戦前と今との対比があります。ぼくら世代としてはよくわかる。古いものを今に復活させる、今を古い時代にもどすっていう彼の危機感を、彼は脚本の中にそうとははっきり書かないが底流にある。 そして結局、王様は大臣と手分けして2人のねずみを殺してしまおうと考えるが、しかし、そうさせない力がある。 王女の弟の少年、少年と同世代の大臣の息子を中心にした、こどものねこたちの力がある。こどものねこたちが計画をねって、王と大臣の計画を立ち聞きして、別の計画をねって、2匹のねずみが殺されないように物語は進む。



「まれびと」 として生きるということ

そして、2匹のねずみは去っていく。 そして、これは私たちが原作の絵本を読んだ時から感じていたんですけれども、「まれびと」という考え方が日本であったんですが、どこか知らない土地からやってきた旅人が、その土地で何か贈り物をして、また去っていくという、日本では古代の伝説とか神話とか様々なものの中に語られていることですね。舟に乗って、兄妹のねずみがねこの国にやってきて歌と踊りの楽しみを与えて、そしてまたどこへでもなく去っていく。このねずみたちの行動っていうのは、「まれびと」という考え方にぴったり重なるわけですね。

脚本には、「あなたはいったいだれなのだ。」という王女の質問に旅人の兄が答える。

それは、私共は歌と踊りを、その楽しさを伝えるためにおそらくは
生きているのでしょう。　仲間の多くは死に絶えても、なお生き続ける
もっと遠くの　もっと大勢の生きものの仲間たちのために。
ただそれだけのために、きっと。

そう考えると、2匹のねずみの仲間の王が死に絶えても、生かされていると考えられる。ということは、彼らはいつ死ぬのかとも考えられる。死なない、死ぬことができない存在かもしれない。歌と踊りその楽しさを伝えるために生かされている。この仕事をずーっと続けていくことは、ただ幸せというよりかは複雑な感情を持って生きているということではないか。SF的な物語の中にもそういう存在がある。「死なない」というのはかえって苦しいことかもしれない。このねずみたちはそういう存在かもしれない。はっきりとは書いてないけど、私たちには想像できる。

「旅人たちの歌」というのがあります。それは旅人が「どこからきたんだ」と問い詰められて歌った歌。これはこの作品の1つの基調、ベースになっている。

♪　どこからきたの　どこへ行くの　　ずっと 遠くて うんと近い
おなじ空の　星たちの下

これで2人の旅人は去っていくわけです。初演のとき、これをずっと見ていて1人のこどもが「あっいっちゃったよ」といった。 それは本当にこの物語の本質をよく表している。このあといっちゃったという2人の旅人は結局いってしまうということは、こうした物語の行きつく先なんですね。それじゃあ私たちと一緒に楽しく暮らしましょう、という話にはならない。それがこういう「まれびと」たちの物語の良い所だと思います。